

演劇集団 つむぐ 第一回公演作品

「Ms. Poltergeist」 作 田中将之

あらすじ

今より少し昔の時代。

画家を目指す少女、「ホロ」、彼女は唯一の家族であり、自身に絵を教えてくれた祖父から画家になることを反対されていた。

彼女のことを陰ながら心配する幼馴染、「春樹」の存在もあり、ホロと祖父は互いに歩み寄ろうとしていた矢先に、祖父が急逝する。

同じ頃、人生を全うし、死のまどろみから目覚めた幽霊の淑女「ネマ」。彼女に死後の世界のルールを教え、導く幽霊「エクト」。

ネマとエクトは、ホロの様子を見守りながら、ネマの生前の記憶を辿る。

祖父の死により、筆を折るか迷うホロ。ホロを取り巻く死者と生者が、新たなホロの絵を完成させる為に祈りを届ける。

やがて、一枚の絵が完成する。

登場人物(女4名 男4名)

ホロ(女)・・・本名帆場ハヅキ。両親を早くに亡くし、画家であった祖父に絵を学

藤山 春樹(男)・・・ホロの幼馴染。

帆場 大地(男)・・・ホロの祖父。若い頃は画家として活動したが、孫であるホロが画家を目指すことに反対している。

帆場 夏海(女)・・・?の孫

ネマ(女)・・・人生を全うし、死から幽霊として目覚めた幽霊。

エクトと共にホロを見守り、自身の生涯を振り返る

エクト(男)・・・ネマを死後の世界で導く男。飄々と人をからかう性格の様に見える、人の心の機微に敏感である

ソフィ(女)・・・ネマの生前の母のような姉のような存在であった女性。

ジョネス(男)・・・ソフィの兄。人身売買組織に属している。

第一場

(舞台上、イスに座り、眠るように死んでいるネマ、灯りのついたランタンを片手に登場する
エクト)

エクト みなさん、こんにちは、そしてこんばんは。今、何時でしょう？ああ、昼の13時
ですか、失礼しました。生憎、我々ポルターガイストには、時間というのがどうに
も曖昧で。

「ポルターガイスト」で、今さらつと言いましたけど、一般的に言うポルターガ
イストって、こう、お皿飛ばしたり、天井裏でドンドンしたりする、騒々しいタ
2 イブの方達だと思いませんか？

まあ私もね、死んだばかりの頃はそういう悪戯に興じてみたりしたのですが、
早々に飽きまして、名前だけ、そう名乗ってます・・・

誰にでしょうね？名乗る相手もないのに。

あ、いえ、皆さまのお望みとあれば、ポルターガイストっぷりをいかんなく発つ
してもよいのですが・・・家主に怒られますので、ご勘弁ください。

そうそう、最初っからここに座ってるこの子、気になりますよね

可愛い子でしょう？ところがこの子・・・死んでるんですひゃー！

みなさん、人間って死んだあとどうなると思います？想像できませんよね？ あー
怖い！・・・あ、取り乱しました。失礼。

本日のお話しは、この子と、もう一人、絵描きを目指す女の子の、二人のお話。
どうぞ、おもしろおかしくご覧ください。

神は天にいまし、世は全てこともなし。

※パントマイムによる進行

(音楽と共に舞台上を多くの名もない人達が行き交う。そのなかをさまよっているネマ、悠々と彼女を観察しながら歩くエクト)

仮面をつけた魂たちがネマを取り巻く。それはまるで彼女の走馬灯のようである

- 1・ネマに優しく近づく女性、後ろにいた男がその二人を引き裂き、拳銃を撃つ
- 2・ネマに求婚をする男性。二人の子供とおぼしき青年、息子の死
- 3・伴侶との死別・ネマ自身も眠る様に亡くなる)

※パントマイム終了

エクト「こんにちは」で大丈夫かな？

ネマ　　……！

エクト　　どうやら君は、まだ間もない様だね。魂の姿となつてから

ネマ　　たましい……？

エクト　　そう。今の君は、いわゆる「幽霊」というヤツさ

ネマ　　え？

エクト　　実感が湧かないかい？ま、おいおい理解していくはずさ

ネマ　　私……死んでるんですか？

エクト　　まぎれもなく。君は自分が何者であったか覚えてるかい？

ネマ　　(無言で首をふる)

エクト　　そうか。では、ここがどこで、我々が何者であるか、ご説明いたしましょう！

現代において命のはじまりは化学反応によるものと分かり

精神とは脳を流れる電気信号、アイデンティティは記憶情報の塊に過ぎず

神も悪魔も存在を証明できない無慈悲な世界で、人は孤独に生まれ生きていく

生まれる場所や時代を選ぶことは誰にもできない。生まれ落ちた瞬間に定め

られている条件、人はそれを宿命と呼ぶ。

当たり前に残酷な世界で、人はもがき苦しみながら、運命と戦っている

やがて生きとし生けるもの全てに訪れる生の終焉
存在することを証明できない、魂のまつろう場所 天国でも地獄でもない、
ここはまぎれもない現世

宗教家が叫ぶ死後の世界などではなく

ただいづれ訪れる、漆黒の虚無への入り口

生前の人種、国籍、肉体の欠損、肩書、社会的地位

それらが消え去った先の、純然たる原初の形

生者と死者

互いに思いながらも干渉することはできないただ、自分の存在の不確かさへの葛藤
に、世界を軋ませるそれこそが我々、「ポルターガイスト」

エクト ご理解いただけただけかな？

ネマ ピンときません

エクト それは残念

ネマ あなたが変な人であることだけは理解できました

エクト そいつは結構

ネマ 私、これからどうなるんですか？

エクト 好きにしたらいい。生前君がどんな人間であったかなど意味はない。

お腹が空くことも、眠くなることもない。

僕たちには必然性も、欲望も既にないのさ。何せ死んでいるんだからね。

ネマ 必然性も、欲望もない

エクト 暇つぶしに「人間観察」でもしていたらどうだい？結構面白いものだよ。

生きてた時の事を思い出すかもしれないし、思い出さないかもしれない。

ネマ ……あなたなんなんですか？変な格好して

エクト 僕も君と同じ「幽霊」さ。変な格好というけど、君の服装もなかなかのものだね

ネマ ……！！

エクト どうやら、僕たちの姿は死んだときの年齢や姿は関係ない様だ。当たり前だ、心の形なのだからね。そうだね、この姿は僕の趣味だ。

ネマ じゃあ、私のこの姿も

エクト 君の心が望んだ姿の様だね。実に可愛らしい

ネマ ジロジロ見ないでください。気持ち悪い。

エクト お！自分の感情を理解してきたようだね。実にマーベラスだ！楽しいポルターガイストライフをエンジョイしたまえ！

ネマ 日本語で話しをしてください

エクト ふふっ、君は僕が日本語を話していると感じているようだけど、僕には君がフランス語で話しているように感じているよ。

何度も言うけど、魂の交流だからね。自動翻訳付きっことさ

それじゃC, e s t l a v i e (立ち去ろうとする)

ネマ 翻訳・・・されてないじゃない。ねえ！あなた！名前は？

エクト 逆に聞こう！お嬢さん、貴女の魂の名前は？

ネマ ……ネマ

エクト ネマ！いい名前だ！僕の名はエクト！以後お見知りおきを。

第二場

ホロ おじいちゃん！なんで許してくれないの！？

大地 またお前は！絵ばかり描きおって！

ホロ おじいちゃんも昔、画家だったんでしょ！？なら私の気持ち、分かるでしょ！

大地 画家だったから反対してるんだ

ホロ なんで！

大地 現実を考えろ

ホロ それは・・・わかってる

大地 なに？

ホロ そんなことわかってる！でも、どうしても諦められないの！

絵を描くことが、私の生きがいなの！だから！

大地 ただ描くだけなら、趣味で描いていればいい。違うか？

ホロ おじいちゃん

大地 お前には無理だ。諦めろ。

ホロ そんなこと！

大地 「画家だったから」分かるんだ。

ホロ ……おじいちゃんの・・・ばか・・・

(ホロ退場)

(入れ替わりに春樹登場)

大地 なんだ！もう帰ってきたのか。少しは考えなおし

春樹 じいちゃん、久しぶり

大地 お？おお、ハル君か！

春樹 ホロいる？

大地 それが、ちょうど今出てった所だな。・・・まあどうせすぐに帰ってくるだろうから

あがって待ってなさい

春樹 お邪魔します

大地　しかし、急にどうしたんだい？

春樹　じいちゃんの顔が見たくなってるさ

大地　似合わんことは言うもんじゃないぞ

春樹　冗談だよ、ホロの様子が気になってるさ。あいつ、最近絵を全然描かないんだ。なんかおかしいなって思ってるさ

大地　そうか。

春樹　じいちゃん、なんか知ってる？

大地　ワシに、画家になる事を反対されたせいだろうな。分かりやすいやつだ。

春樹　え・・・？

大地　放っておいてくれ。そのまま諦めてくれるならそれが一番だ。

春樹　なんだよそれ。心配じゃねえのかよ

大地　絵を描く事自体は別に構わん。趣味でならな。だが、あの子は、普通に就職して、人並みの幸せを探していればそれでいいんだ。

春樹　挑戦くらいさせてやれよ！

大地　・・・

春樹　じいちゃん、俺、忘れてねえよ。子供の頃のこと

おじさんとおばさんが事故で死んじゃまって、心を塞いじまったあいつが、今も生きていられるのは

大地　絵のおかげ・・・だな・・・

春樹　じいちゃんの教えた、な

大地　せめて気が紛れるかと思ってるな

・・・だが、手慰みではじめたことに、人生を賭けて良い訳がないだろうでも、あいつはが本気なのは、絵を見れば分かるはずだよ

大地　そんなことはわかっとなる。

春樹　じゃあ、なんで応援してあげないんだよ！

大地　同じことを何度も言わせないでくれ。

確かに「絵を描く」事があの子の救いになったかもしれない。

子供でいるうちはそれでいい。

だが、それだけで生きていけるほど甘いもんじゃないんだ

特別な人間になどなってほしくない。ワシは、ただハツキに、普通の幸せの中にいてほしいだけなんだ。どうかそれを分かってほしい。

春樹　じいちゃんの言ってる事、分かるけどさ・・・でも、分かる訳にはいかないよ。

大地　分かってはもらえないか

春樹　だって、どっちも同じだろ。ホロがじいちゃんに教わった絵を描き続けたって気持ちも、じいちゃんがホロを心配する気持ちも。

相手のことを思ってる事じゃねえか。

大地　・・・

春樹　だから、どっちか一つって訳にいかねえだろ。

大地　・・・

春樹　俺、ホロと話してくる。

大地　そうか

春樹　後でホロの話、ちゃんと聞いてやってくれよ。

大地　・・・

春樹　約束だよ。

第三場

エクト また会ったね。何か面白いものは見つけられたかい？

ネマ あら、こんにちは。そうね。あの子

エクト へえ

ネマ おじいちゃんと喧嘩してみた

エクト まあ、誰にでもある話だね

ネマ やりたいことを反対されたくらいで大袈裟よ。みてられないわ

エクト 見てられないものを見続けている、君の方が僕には面白いね。実にいい矛盾だ。

ネマ うるさいわね

エクト しかし、君もこの状態にだいぶ馴染んできたようだね。

ネマ まあね。でもホントにお腹も空かないし、眠くもならないのね。不思議。でも

エクト でも、何かな？未練があるのかい？

ネマ そういう訳じゃない。もう自分が死んでることは理解してるし

だけど、私これからどうなるんだろうって考えるとね。

エクト それは悩んでも詮無いことだよ。

僕たちはあくまで傍観者でしかないのさ。ただ見ているだけ。何もできはしない。どうにもならない。

ネマ それじゃあ、何もできないでいる苦しみが永遠に続くとしたら、ここはまるで地獄じゃないの

エクト 気付いてしまったか・・・その真実に・・・

ネマ じゃあ、やっぱり

エクト フフフフ・・・アハハハ！なあんてねえ！あれ？信じちゃった？ 最初に言ったじゃないか。ここは天国でも地獄でもないって

そもそも、天国と地獄なんでものが存在すると思っていたのかい？

そんなものは、死の恐怖を紛らわす為の空想だよ！

ネマ 空想って。じゃあ、私たちは成仏するとか、生まれ変わるとか、そういうことにはならないの？

エクト だから！成仏とか生まれ変わるとか！なんの根拠があつて！そんなことが起こり得ると信じられるんだい！まったくおめでたいね！

ネマ なによ、急に大きい声ださないでよ・・・だって、人間は死んだら生まれ変わるものじゃないの？

エクト まったく、人に植えつけられた価値観でしか君はモノを考えられないのかい。

ネマ 言ってくれるじゃない

エクト 一応言っておくが、僕だってこの「死後の現世」の全てを知っているわけではないよ。

でも逆に聞くけど、君は生きてる間、自分という存在が、どのような運命を辿るか知っていたというのかい？ 分からなかったよね？自分の魂や心が何処からやってきて、何処へ向かっていたのかなんて

それでも、君は生きていた。自分が何故生きているかなんて考えることもなく。与えられた価値観を頼りに。

まあ、人間なんてその程度の認識で生きているのが大半だからね。別に恥ずかしいことじゃない。

ネマ 好き勝手言ってくれるわね。まるで、私の生きてた時を知ってる様な言い草ね。

エクト だとしたら？

ネマ え？

エクト ……ま、だとしても、それを君に話して僕に得があるわけじゃない。

ネマ 意地が悪いわね

エクト とはいえ、あまり君に嫌われるのもイヤだし。お話しも進まないし。一つだけヒントを伝えておこう。その、「リボン」それを「誰に」もらったのか。思い出してごらん

ネマ リボン？

ソフイ ネマ・・・

ネマ 誰・・・お母さん・・・？

(ソフイ、ネマ、エクトの順で退場)

第四場

ホロ もう、なんでおじいちゃんてあんなに強情なんだろ。わたしのこと可愛くないのか
な？あ、もしかして私ホントは橋の下から拾われてきた子だったり・・・って、そん
なわけないでしょ。私のバカチン。

もーいい。なんでもいいや。考えてもわかんない。あーお腹へってきたー

春樹 こんなとこでなにやってんだよ。

ホロ あれ？春樹、どうしたの？

春樹 どうしたのじゃねえよ。じいちゃんお前のこと心配してたぞ。

ホロ そーんなわけないよ、わたし、橋の下の子だし

春樹 くだらねえこと言ってるなよ。

ホロ 大体、何の用

春樹 別に。なんとなく話聞いたから、なんとなくお前を探してただけだよ

ホロ はあ？

春樹 なあ、覚えてるか

ホロ 何を？

春樹 お前が初めて絵を描いた頃のこと

ホロ まあ・・・あんまり思い出したくないけどね

春樹 そうだろうな。でも、俺はよく覚えてるぜ。

小学校の教室で、いつも一人ぼっちだったやつを覗いてみたら すごい
が描いてあってな

ホロ 別にすごくなんかないよ。ただのラクガキ。

春樹 ラクガキだろうとなんだらうと、こう、グツときたんだよ！

ほら、確かあの時描いてた・・・なんの絵だったっけ？

ホロ 覚えてないんじゃない。テキトーなこと言わないでよ。

・・・まあでも、ハルが褒めてくれたのはよく覚えているよ。それから色んな人が私
の絵を見てくれるようになったこと。

春樹 嬉しかったか？

ホロ そりゃあね

春樹 褒められたのが？

ホロ ちよつとはね

春樹 それだけか？

ホロ それだけ・・・ってことはないけど

春樹 「誰が」一番喜んでた？

ホロ だれって・・・

春樹 わかってんだろ

ホロ ……

春樹 画家になりたいって夢。本気で考えてるなら、ちゃんと話してこいよ。

ホロ・・・うん。わかった。

(救急車のサイレンが遠くから聞こえてくる)

ホロあれ・・・私の家のほうだ・・・

(ホロ、春樹退場)

第五場

(雑踏の中で浮浪者の様に路上に佇むネマ、街角で多くの男に言い寄られながら「花を売る」ソフィ、男達をあしらう合間にネマのことが気になるソフィ)

ソフィ ねえ。あなた、ひとりぼっちなの？

おうちはどこ？ お父さんやお母さんは？

ネマ さわらないで。

ソフィ ねえ、わたしの家にこない？

ネマ なんて

ソフィ いいから！ほら！

ネマ 離して！わたし、きたない

ソフィ 汚くなんかないよ

ネマ みんな、そういつてた。おかあさんも、おにいちゃんも。

ソフィ みんなって誰？あなたのお母さんもお兄さんもお父さんも私は知らない。

私ね、知らない人の言葉は信用しないの。

あなた、とつても綺麗よ？

ネマ なんて。私の顔も手も、足も、まっくろ・・・だから

ソフィ あなたの手、土をいっぱい触った手ね。見れば分かる。私の好きな手よ。

ネマ でも。

ソフィ 私の家、すぐ近くの。ほら、お風呂入れてあげるから。いらっしやい
ネマ うん・・・。

(二人、家の中に入る。ネマ着替えを終えて出てくる)

ソフィ あら！とつても似合ってる

ネマ あの

ソフィ なに？

ネマ なんて、こんなことしてくれるの

ソフィ 嫌だった？

ネマ そうじゃない。わたし、あなたに助けてもらう理由がない

ソフィ あなたが寂しそうにしていたからじゃダメかしら？

ネマ わからない。だから、怖い。

ソフィ そっか、わからないから怖いのかあ。そうね、理由があるとしたら、

私ね、妹がいたの

ネマ 妹？

ソフィ もう、死んじゃったんだけどね。この服も・・・妹の服なの。

ネマ ……

ソフィ 道端でぼろぼろなあなたを見て、つい助けたくなくてね

……ううん、違う。私がさびしくてあなたに声をかけただけなの

ごめんね、急に連れてきて。お母さんやお兄さんに心配させてしまうわね

ネマ だれも、心配なんかしてない

ソフィ え？

ネマ おかあさんもおにいちゃんも、私を「きたない」「気持ち悪い」って言って、たたくの。だから、逃げてきた。

ソフィ ……

ネマ あなたもわたしをぶつんじやなかったって

ソフィ そんなこと

ネマ でも、優しくしてくれた・・・ありがとう

ソフィ そういえばあなた、名前は？

ネマ 覚えてない。だれも呼んでくれなかった。

ソフィ ……じゃあ。ネマって名前はどうか？

ネマ ネマ？

ソフィ そう、ネマ。それがあなたの名前。どう？

ネマ うん

ソフィ 私はソフィ。よろしくね

エクト 思い出せたかい？

ネマ うん

エクト それからキミはそのお姉さんと末永く、幸せに暮らしましたとき
めでたしめでたし、ってどこかな？

ネマ そう、だったらよかったんだけどね

エクト 違ったのかい？

ソフィ ネマのお陰でこのお店も随分楽になったわ

ネマ そんなことないよ

ソフィ ううん。この花屋、前は他の人と一緒だったんだけど、最近は私一人だね。

ネマがいてくれて助かってる

ネマ ソフィの為だもの、私ががんばる

ソフィ ありがとう

ネマ そういえばさ、ソフィ

ソフィ なに？

ネマ 時々、この町の外の人がお客さんでくるよね？

ソフィ ……そうね

ネマ ウチのお店、珍しい花が置いてあるわけじゃないのに、不思議だよ

ソフィ そうね

ネマ あ、ひよっとして、ソフィが美人だから男の人がいっぱい来てるんじゃないの？

ソフィ そんなわけないでしょ。皆、お花が綺麗だから買いに来てるの。それだけよ。

ネマ　　またまたー。あ、でもさ、そんなにお花が売れるんならさ、今度、お花たくさん用意して、もっと人がいっぱいいる所に売りに行こうよ。

ソフィ　・・・

ネマ　　私、この町から出たことないから、いろんなところについてみたいんだ。

いいでしょ？・・・ソフィ？

ソフィ　いい？ネマ。私たちは、明日を生きられればそれで充分。

余計なことは考えないで、早く寝なさい

ネマ　　え・・・？・・・うん

(ネマ退場、ジョネス入場)

ジョネス　しばらく見ない間に、この「花屋」も随分小奇麗になったもんだ

ソフィ　・・・もうそんな時期だったかしら。今年は仕事が早いのね

ジョネス　商売繁盛ってことさ。その方がお前もうれしいだろう？

ソフィ　別に。あなたの顔を見ない方がよっぽど嬉しいわ

ジョネス　言ってくれるな。何をどうしたって俺とお前の、

汚い根っこの部分は変わらないんだ。

ソフィ　大体、今時分に来てもらっても、売り物になる「花」はないよ。

ジョネス　とぼけるんじゃない。いるじゃないか。

俺たちの妹の名前をつけたあの娘のことだよ。

ソフィ　・・・あの子は、違う

ジョネス　何が違うってんだ？

お前も最初から売り飛ばすつもりで連れてきたんじゃないのか

ソフィ　・・・違う

ジョネス　別にお前がどう考えてようと関係ない。俺は「組織」の指示で「収穫」に来た。

どうするべきかは、お前が一番分かっているよな？

ソフィ　あの子は、あの子だけはやめて。嘘でもいい、嘘でも私の「家族」なの。

ジヨネス 寝ぼけたことを言うな。「組織」に逆らって生きていけると思っているのか。
ソフィ もう嫌なの。もう騙したくないの。私も「家族」が欲しいの
ジヨネス 本気で言ってるのか？

(ネマ入場)

ネマ だれ？

ジヨネス 起きてたのか。はじめまして、お嬢さん。

俺は、ソフィの「お兄ちゃん」だ。よろしく。

ネマ ソフィのおにいちゃん？ ホント？ ソフィ？

ジヨネス すっかり懐いてるようだな

悪い夢なら見せない方がよっぽど優しいぞ

ソフィ 夢ぐらい・・・見てもいいじゃない

ジヨネス どうせ覚める夢だ。なら、最初から見せるべきじゃあない。

お前が拾ったことで、この子は「組織」に目を着けられた。

どういう目にあうか、分からない訳じゃないだろう？

ネマ なんの・・・話を、してるの？

ジヨネス お前が自己満足で拾わなければ、違う運命があったかもしれない。

未来を閉ざしたのはお前だ。「家族」と望んだこの子のな

ソフィ やめて

ジヨネス 俺もお前も生き残る為に「ネマ」を組織に差し出した日から、楔から逃げることは出来ないんだ。

俺がここで見逃したとしても、お前が逆らったことはすぐにばれる。そうなれば、俺もお前も、もちろんこの子もただでは済まない。

誰一人幸せになることはできない。

ソフィ やめて・・・！

ジヨネス考えるまでもない。家族ごっこはおしまいだ。

もう一度来る。その時まで、話すべきことは済ませておけ

(ジヨネス退場)

ネマ　　ねえソフィ、なんで泣いてるの・・・？

ソフィ　ネマ、私はね、今まで何人も騙してきた。妹のことも、あなたのことも

ネマ　　ウソだ！ソフィは優しくかった！全部ソフィがくれたんだ。ソフィは

ソフィ　私、ずっと家族がほしかった。でも、こんな汚れた手の私に、幸せを求める資格なんてないのね。

なんででしょうね、あなたの顔・・・妹によく似ていたからかしらね・・・ポロポロのあなたを見つけて、面倒を見るうちに、あなたに名前を呼ばれる度に、あなたが愛おしくて、愛おしくて、夢を、見てしまっていたわ。

「ネマ」と家族でいられるんじゃないかって。二人で幸せに生きていけるんじゃないかって・・・

ネマ　　・・・

ソフィ　この手を見て。(腕に巻いてたりボンを外す。そこには「組織」の焼き印がある) 妹を売って、ジヨネスと一緒に「組織」の一員となった日から、私の手は穢れているの。あなたの綺麗な手とは違うの。ごめんね、ネマ。

ネマ　　謝らないで。

ソフィ　ごめんね。ごめんね

ネマ　　私、騙されたなんて思っていない！

ソフィ　え・・・？

ネマ　あ　の人の言った事、全部はわからない！でも、でも・・・！！

ソフィ　ネマ・・・ねえ、これ、受け取ってくれる？

ネマ　　リボン？

ソフィ　妹が着けていたリボン・・・これを、私だと思って、ね。

ネマ どういう・・・こと？

ソフィ 逃げなさい

ネマ え？

ソフィ まだ、あなた一人でなら逃げられる。

汽車に乗って遠くの町に行きなさい。

ネマ やだ！ソフィも一緒に！

ソフィ 私と一緒にだと、あなたは生きていけないの！

もしも、私のことを家族だっと思ってくれるのなら！逃げなさい！

そして生きて。たとえ一人でも、きつと見つかる、あなたを必要としてくれる人が。

19

あなたの、本当の家族が。私があなたと出会えたように。

私を「お母さん」だと思ってくれるなら、あなたの幸せが私の願いだから。

ネマ そんなの、わからない。

(ソフィ、ネマを追い出す。ネマ退場)

ジョネス 時間だ、準備はできているか

ソフィ ……

ジョネス あの子は、どうした。

ソフィ さあ

ジョネス 逃がしたのか

ソフィ ……

ジョネス お前は覚えているか？ネマの顔を

ソフィ 忘れる訳ないでしょ

ジョネス 俺はもう、覚えていない

ソフィ 薄情ね

ジョネス 俺は、あの子を見て、少し思い出せた。

ソフィ そう

ジヨネス 描きかけて止まっていた、あの絵。進められそうだ

ソフィ そう

ジヨネス だから、許してくれないか

ソフィ 誰に？何を？

ジヨネス・・・

(銃声後、暗転)

(明転後、ネマとエクトがいる)

エクト それからは？

ネマ それからは、もっと過酷だったわ。もとの家に戻ることも出来なかったから、遠くの街に行く汽車に隠れて乗って、生きる為ならどんなことをしても生き延びた。

エクト それはそれは

ネマ ソフィが「お母さん」が、生きろって言ったから、死んでたまるかって。

そうするうちに、私と結婚したいってしてくれた人がいて、一緒になって。子供も生まれて、私は「お母さん」になって。

エクト よかったじゃないか

ネマ そして、みんな、私より先に死んでいった。

エクト・・・

ネマ 一人息子は戦争で・・・主人も、私を置いて病で。そういう時代だった。そんな時代の途中で、私だけが生き残っていた。

エクト そんな自分の境遇を恨んだかい？

ネマ どうかしらね。生きてる時は、そんな感傷に浸る暇もないくらい、生きることには必死だったから。

エクト 今は？

ネマ　今は、まだ分からない。だから、ゆっくり考えるわ

エクト　そうすると良い。時間はいくらかでもある

ネマ　そうね

第六場

(アトリエで作画に勤しむ、若き日の大地とジョネス)

大地 国に帰るのか？

ジョネス しかたないさ。戦争が始まれば、この国に俺の居場所はない。

大地 さびしくなるな

ジョネス まあな

大地 絵は、続けるのか？

ジョネス 出来れば、な。

大地 今描いてるヤツはどうするんだ？

ジョネス 出来ることなら完成させたいが、おそらく、間に合わないだろうな

大地 もつたいないな

ジョネス まあ、もともとあまり気のすまない作品だったからな。

いい区切りだ

大地 ……なあ。その絵、置いていくんだったら俺がもらってもいいか？

ジョネス 別に、構わないが？何でこれなんだ？

大地 俺、この作品を最後に、絵を辞めようと思う。

ジョネス なに？

大地 俺にも出来るんだ、子供が。来年生まれる。

だから、もう金にもならない絵ばっかり描いてる訳にもいなくなつた。

ジョネス もつたいないな。

大地 だがな、絵そのものを諦めるわけじゃないぞ。俺はこれからたくさん稼いで、

俺の子供を立派な画家に育てるんだ！孫の代までかかってもいい！

その時に、お前の絵を、子供や孫に見せてやるんだ！

ジョネス ……未完成のこいつをか？

大地　未完成だからこそだ！お前の絵は完璧だ、見るものを圧倒し、自分の才能の無さを痛感させられる程にな。

　だがもし！この未完成の作品を見て、その絵に足りないものが何か、自分で答えを出すことができれば、俺の子や孫は、お前に勝ったことになる・・・違うか？

ジョネス　おかしなことをかんがえるな(笑)

大地　笑ってくれて構わないよ。俺はこれから家族の為に生きるんだ。

ジョネス　そうか。好きにしろ。

大地　お前も国に帰れば、家族、いるんだろ？大切にしろよ。

ジョネス・・・俺の家族は、絵だけだ

大地　　どうということだ？

ジョネス　言葉通りの意味さ。分かったよ、ホバ。お前にならこの絵、預けてもいい。

大地　　ありがとう。ジョネス

(ジョネス、大地に絵を手渡し去る)

第七場

春樹　じいちゃんのこと、今でも信じられねえよな。あんなに元気だったのに
心筋梗塞って・・・

ホロ　葬式も終わったばかりだから、気持ち、整理つかないだろうけどさ。元気だせよ
また、だ

春樹　？

ホロ　また、一人だ。あの時と同じだ。父さんと母さんが死んだ時と。

春樹　・・・

ホロ　なんにも、なくなった。

春樹　絵が・・・あるじゃねえか。じいちゃんが教えてくれた

ホロ　描けないの！筆を持つだけで手が震えるの！絵のことを考えると、おじいちゃんが
頭から離れなくて、何も・・・できなくなるの・・・

春樹　ホロ・・・

ホロ　もう頭の中グツチャグチャなの！何をすればいいのかわからない！

春樹　しっかりしろよ！

ホロ　おじいちゃんに認めて欲しかった！もっと私の描いた絵を見てほしかった！　プロ
になれなくてもいい！おじいちゃんにもっと・・・

大地　いつの頃からだったか、泣いてばかりだった子供が、手を引かれんでも、行きたい
ところへ走り出すようになったのは

今でも覚えているよ。お前が生まれた日のことを

自分の人生に意味があったと、あれほど思った日は他にない位

お前が自分の足で歩いた日、ランドセル背負って学校に行った日、友達に「ホロ」
ってあだ名をつけてもらったって、嬉しそうに話してくれた日

絵が大好きだって、一生懸命描いてた日

そのすべてが、宝物だった。

お前も、もう大人になる。死んじまったワシにできることは、もうないし、しては
いけないのかもな

誰の為でもない。これからは、自分の心の為生きなさい

第八場

エクト その後の様子はどうだい？

ネマ おじいさん、亡くなってしまったみたい

エクト おやおや。まあ人間、いつ死ぬかなんて、誰にもわからないからね

大地 いやあまつたく

ネマ おじいさん、心のこりだったでしょうね・・・

大地 そうですなあ

ネマ ……え!!!?あの・・・ええ!!!

大地 いやー、気が付いたらこんな感じでおりました。

ネマ そっか、そりゃ、亡くなったんだものね・・・

エクト お初にお目にかかります。エクトと申します。

大地 帆場です。ワシあ死んだはずですから、あなた方は、天使さんと悪魔さんですか
な？

エクト いえ

ネマ ただの

ネマ・エクト 「一般ポルターガイストです」。

大地 ぼるたー？ああ、なるほど。いやあしかし、死んだあとどうなるかなんて、怖くて
仕方なかったものですが、なかなかどうして。

ネマ はあ

大地 お二人とも、どうやらウチの孫の様子をご覧になっていたようで。

いやー、どうです？思い込みが激しくて、強情っぱりで、考えなしに行動して、
でも、友達には事欠かないようで、自分の好きな事には一生懸命な

・・・自慢の孫ですわ

ネマ ……そうですか

大地 生きてる時は、ぶつかることもありました。死んでしまえば、

もう、ただあの子が幸せである事を願うだけです。

ネマ そんなに割り切れるものですか

大地 あの子にしてやれることは、もう何もありませんからな。

エクト 心中、お察しいたします。

不肖ながらワタクシ、この「死後の現世」のルールを皆様より存じ上げております。

お望みとあれば、安らかな眠りを享受できる地へとお連れいたします。

大地 そうですか。では、お言葉に甘えることといたしましょう。

ネマ あの一！

大地 なにか？

ネマ 本当に、何もないのでしょいか

だって、あんまりじゃないですか。おじいさんが亡くなって、あの子、あんなに落ち込んでしまつて・・・

エクト それが「ルール」だからね。

ネマ 「ルール」つてなに！？エクト、あなた言ったわよね！ 植え付けられた価値観でしか考えられないのか？つて！

だったら！この「死後の現世」のルールだって、疑問を持ちなさいよ！絶対かどうかなんてわからないでしょ！

エクト ……へえ、じゃあ聞くけど、何ができると言うんだい？君に？

ネマ それは・・・これから考える！

エクト (鼻で笑う)

ネマ 思い出して分かつたわ。自分に何ができるか、どうすればいいかなんて分からなくたって、私は生きてた。

どうすればいいかじゃない。私がどうしたいかで生きていた。

だったら・・・たとえば死んでいようと、私の意識が、「魂」があるのなら。

私は、私の「願い」の為に「生きる」わ。

(ネマ退場)

エクト ふう・・・「生きる」だって。つくづく面白い子だよ

大地 あのお嬢さん・・・なんであんなに・・・

エクト ああ、ちなみにあの子、見た目は若いですが、亡くなった時は70歳のおばあさんだったんですよ

大地 は？

エクト あの子に自覚がないようだから言わなかったんですが、この「魂」の姿にも「ルール」があるようで。どうやら生前、一番幸せだった時の姿になるようです。

大地 ほほう

エクト ほとんどの人は若く美しい時の姿になります。彼女のように。

大地 ならば、私のこの姿は・・・？

エクト 言うまでもないでしょう・・・そういう事です

(うなづく大地、微笑むエクト。エクト、大地を連れて退場)

第九場

(春樹登場。同時にネマも登場、ネマ、舞台奥で様子を伺っている)

春樹　いつまでそうしてるつもりだ……。

ホロ　……

春樹　気持ちは分かるけど！いや、全部はわかんねえけどよ！　お前そんなやつじゃなかっただろ！

ホロ　……うるさい

春樹　聞けよ！確かにじいちゃんは反対してたよ！でもそれは……

ホロ　……

春樹　お前を否定してたんじゃないよ！お前に幸せでいて欲しいって誰より願ってたんだよ！頭ん中グチャグチャかもしれないけどよ！それだけは分かれよ！

ホロ　……うるさい

春樹　……なあ！前に聞いたよな！

お前が最初に絵を描いた時のこと！覚えてるかかって。

覚えてないなら言ってるよ！

誰とも話せなくて、誰にも理解されてなかったお前が、ノートに描いてた

「家族の絵」

死んじまった父さんと母さん、それにじいちゃんと一緒にいるお前の、家族の絵。

芸術なんてわかんねえけどさ、ガキだったけどさ、そんな時見たお前の描いた絵、

俺……好き、だったんだよ……

ホロ　……

春樹　……描けよ、描いてくれよ、描くしかねえだろ！

それがお前だろ？描くことが、じいちゃんの為にできることじゃねえのかよ！

……あぁっ！ちくしょう！

(春樹退場↓ネマ、一生懸命無音で何かを伝えようとしてもがく、そして

物音を一つ立てる)

ホロ 誰……？気のせいかな。あれ？この絵、おじいちゃんの絵じゃないジョネス？色

が……ない……でも……「親愛なる妹」……？

これを描いた人も、家族のために……描いてたんだ……

エクト おかえり

ネマ ただいま

エクト どうだった？

ネマ なにも、できなかったわ。喋れる訳じゃないし、物は少し触れるけど、動かせる程

ではなかったから、ほんとになにも……

あれだけ息巻いてたのに、恥ずかしいわ。

エクト ハハハ……そいつぁ愉快だ

ネマ この上ない無力感に包まれているわ。

エクト 僕が愉快と言ったのは、君が勘違いを重ねていることにさ

ネマ え？

エクト あの子を見てごらん？

(作画にいそしむホロが舞台上にいる)

ネマ なにを……描いてるの？

エクト それはまだ分からない。でも、どうやら「あの絵」がきつかけのようだね

ネマ え？

春樹 ……！おい！ホロ！何描いてんだよ！

ホロ わかんない！

春樹 はあ？

ホロ わかんない！でも、絵を見たの！「家族」を描いた絵を！

春樹 じいちゃんの絵か？

ホロ 違う人の絵だった！未完成の、色のついてない絵だった。

でも、なんか……

この絵を描いた人の、絵の中の女の人への気持ち伝わってきたんだ！

そうしたら、絵を描かずにはいられなくなった！

春樹　　そ、そうか。なんだかよくわからないけど、絵を描く気になったのなら頑張れ！

で、誰なんだ、これ？

ホロ　　だから！わかんないの！でも、見えたの！腕にリボンを着けた、女の人！

春樹　　女の人？

ホロ　　もう！うるさい！邪魔だからあっち行ってて！

春樹　　（笑）　はいはい。わかったよ！

第十場

(作画に集中するホロ、その間、ほかの役たちが彼女の周りに立ち、各々がセリフをとばす)

ネマ あの花・・・あの手首のリボン・・・まさか

ジョネス 俺たちの、ネマ・・・

ソフィ 私たちの、妹・・・

エクト 時間とは、断絶されることなく永遠に繋がっている
一度生まれた命の痕跡、その轍は途切れることなく

春樹 自分にしかない何かなんて、俺にはないし、俺たちは、人と人の間でしか生きていけない。だからかな・・・お前が羨ましいんだよな

ジョネス 心の望むままに生きられたら、どれだけ楽だったろうな・・・
ソフィ 生きる事の意味なんて、誰も教えてくれなかったけれど
生きたいと思う事の意味ならば、あなたのお陰で・・・
ジョネス 罪滅ぼしにもならない、中途半端だった、妹の絵。

お前に預けてよかったよ。ホバ。

エクト 芸術とは目に見えるものを複製することではない。

形のないものを、人に見えるように、聞こえるように、形作る。

空想、幻想、いまはもう、いない人

大地 懐かしいな、ジョネス。お前の絵がワシと同じく、孫の心を動かしてくれるとはな

・・・狙い通りだな、ははっ！

春樹

苦しいだろうけどさ、自分が嫌になるときもあるだろうけどさ。

「人間」だからな。

生きるってのは、全部ホントのことばかりじゃないさ。

でも、お前が描けば、ウソみたいなホントが、現実にも生まれるんだ。それってすごいことじゃねえか　じいちゃんも喜んでくれる

さ！

大地

（苦笑いしながら）ハル君、もうあの子の絵は、ワシではなく、いつかどこかで出会う、未来の誰かの為に描くべきだよ　それに、こうしてずっと見ていたら、やっぱり、未練が生まれてしまうなあ。だから・・・

33

ネマ

嘘でも真実でも、幻想でも現実でも

あの子の心の中にこそ、美しいものが生まれることを私は、願う

エクト

祈り給え願ひ給え。僕たち死せる魂は、針の止まった時計のようなものだ。

だけど、止まった時計も、日に二度、正しい時刻を示す瞬間がある　今がその時であるならば、描き給え、信じ給え。

ネマ

大切な人は皆、私を置いていなくなった

エクト

でも、君は生きていた

ホロ

私、描く。この色のない絵に、私の色を足して

エクト

そう、君は生きるべきだ

（作画に没頭するホロ。やがて絵が完成する、そこに描かれているのは、「ネマ」の姿であったこの間ソフィ、ジョネス、大地退場）

第十一場

ホロ 不思議な気持ちだった。会ったことも、見たこともない人が、私のことを応援してくれてるの。一生懸命生きろ、命の限りにつて

春樹 どういうことだよ？

ホロ 多分、天使・・・かな？なんて。あ、なんか変な死神みたいなもいた気がするな
春樹 それは、ホロの考えた物語なのか？

ホロ 違う。わからないけど、確かに「この世界」に存在してる人だと思う。

春樹 そうなの・・・か・・・？

ホロ きつと、いつかのどこかにいた人。私を見てくれた人・・・
私、わかった。おじいちゃんにはもう会えない。代わりになる人も絶対にいない。

でも、生きていればいつかの未来に出会う、大切な人が今もこの世界にはいるんだ。

春樹 それが、この赤いリボンの人なのか？

ホロ そうかも、知れない。いつか会えたら、いいな、なんて

春樹 そっか、ま、なんでもいいよ。綺麗だぜ、この絵

ホロ ありがとう。

(ホロ、春樹退場)

第十二場

エクト うまくいったようで何より。ねえ、天使様？

ネマ そうね、死神さん？これも「死後の現世」のルールの一部かしら？

エクト いやはや、ルールとは運命とは、新しく書き換えられるものと思いきらされたよ

ネマ 新しいことではないわよ、別に

エクト え？

ネマ 私は願っていただけ。あの子のおじいさんの分まで、あの子の幸せを

エクト なるほど

ネマ 願うことは、生きていても死んでいても、平等でしょ？

だって、私たちには「魂」があるのだから

エクト 確かに、そうかもしれないね。

ネマ だから、運命とかじゃなくて、ただの・・・なんででしょうね

エクト なんだろうねえ。

しかし、これから君はどうしたい？

安らかな眠りをお望みであれば案内するけど？

ネマ 少し、待ってもらえる？

エクト かまわないよ

ネマ もう少し、見てみたいの。あの子がこれからどんな人と出会って、どんな人生を

送るのか。

エクト 好きにするといいいい。

誰も君を束縛することはない、我々は必然性のない存在なのだから。

※冒頭と同じく、パントマイムによる進行

(冒頭のネマの走馬灯のように、その後のホロの人生が流れていく。その後も親友であり続ける春樹。画家となることに挫折するホロ。子供が生まれる。家庭を作った後、と或る日に春樹に写真を撮ってもらう。その背後にはネマとエクトの心霊写真が・・・！)

ネマに魂のランタンを預け、闇夜へ消えてゆくエクト。舞台上にはホロとネマのみが残る)

(ホロの孫娘、夏海登場)

夏海 おばあちゃん！私ね、絵を描いたんだ！見てみて！

ホロ ふーん・・・ま、まだまだね

夏海 もお、私一生懸命描いたんだよ！

ホロ 冗談よ。とても綺麗な絵ね

夏海 ほんと！？

ホロ ホントよ・・・ねえ、夏海

夏海 なに？

ホロ あなたは、なんで絵を描いてるの？

夏海 おばあちゃんが褒めてくれたから！

ホロ ふふっ・・・そう

夏海 へへっ

ホロ もう出かける時間じゃない？お友達を待たせちゃダメよ。

夏海 あ！本当だ！じゃあ、おばあちゃん、私行くね！

ホロ 行ってらっしゃい。道には気を付けるのよ。

夏海 うん！

(夏海、退場。ホロ、眠る様に最期を迎える)

(死の眠りから目覚めたホロ、ネマと視線を交わす)

ネマ 「こんにちは」で大丈夫かしら？

ホロ ！！

ネマ どうやらあなたは、まだ間もない様ですね。魂の姿となつてから

ホロ たましい？

ネマ そう。今のあなたは、いわゆる「幽霊」です

ホロ え？

ネマ 実感が湧きませんか？ま、段々理解していきますよ

ホロ 私、死んでるんですか？

ネマ まぎれもなく。あなたは自分が何者であったか覚えていますか？

ホロ (無言で首をふる)

ネマ そうですか。では、ここがどこで、我々が何者であるか、ご説明いたしましょう！

ネマ 生きとし生けるもの全てに訪れる生の終焉

大地 存在することを証明できない、魂のまつろう場所

春樹 天国でも地獄でもない、ここはまぎれもない現世

ジヨネス 宗教家が叫ぶ死後の世界などではなく

ソフィ ただいづれ訪れる、漆黒の虚無への入り口

エクト 生前の人種、国籍、肉体の欠損、肩書、社会的地位

それらが消え去った先の、純然たる原初の形

ネマ 生者と死者、互いに願うことで、世界は紡がれていく

魂の鼓動を、世界に響かせる

全員 それこそが我々、「ポルターガイスト」

(終)